

奈良県吉野郡川上村に伝わる「朝拝式」の衣裳調査
 昭和女大家政 村井不二子 ○安蔵裕子

目的 奈良県吉野郡川上村神之谷在の金剛寺には、吉野朝の末裔一後龜山天皇皇孫一尊
 秀王（自天王）と弟忠義王の両宮を祀る自天親王神社があり、ここでは長祿二年より今日
 まで毎年二月五日に、尊秀王の遺品の兜その他の武具を御神体として祀り、「朝拝式」と
 よばれる儀式がとり行われている。この後南朝史を背景とし、その隔絶した地域の人々に
 より継承されている式典の秘式と、とくにそこで用いられる衣裳のまつ史的意義について
 研究する。

方法 南朝終焉の歴史的事象、式典の成立事情、及び今日伝わる式典の実際と現存する
 被服資料の实地調査から考察をすすめる。

結果 今日、式典の内容は、変遷とともに簡素化されて来ているが、現在もなお、南
 朝の宮方に仕えた郷士の血統一「筋目」一とよばれる旧家に限り、当日菊の御紋章の付い
 た袴を着用して奉仕、参列する形式が厳守され、荘厳にとり行われている。被服資料につ
 いては、現存するものの実測データを得た。また、「朝拝式」の起源は、南朝断絶の翌年
 から執行された二種類の年中行事、すなわち尊秀王の御命日に行われる慰霊祭と、元来朝
 賀大社の儀であった朝拝式にあり、おそらくは、後に両者が統合され現在に伝わるものと
 推察するに至った。ゆえに今後の研究は、式典の経緯と秘式的変遷をたどり、同時に服飾
 史の観点からの追求が重要となる。